

補章 1

新しい公共圏の創生と消費の共同体

——タンザニア・マテンゴ社会におけるセングの再創造をめぐる——

杉村 和彦

はじめに

アフリカ諸国に対して、さまざまな国際的機関や各国政府の援助協力が続けられているが、援助対象となっている途上国のなかにおいてアフリカ社会の停滞ぶりは突出したものとなり、地域間格差の問題がアフリカに集中している(杉村 [2007c: 25])。これらの援助はアフリカ社会に近代化を生み出そうとするものであり、近代国家の建設や市場化、官僚制度の整備、産業化など、基本的に西洋の近代化モデルをアフリカにも移転すべきものとして展開してきたが、アフリカ社会の拒否反応はほかの地域社会と比較して突出して大きかった。

同時に、アフリカがこうした西欧モデルのもとに開発され、近代化されていくのであれば、後述するように、そこに醸成されなければならないさまざまな社会的・政治的側面での基本的な条件があるのであるが、アフリカをめぐる半世紀の開発においてもなお、それは明瞭な形で醸成されたものとはなっていない。近代化にともなう西洋モデルの市民社会は、いうまでもなく、西洋の時代背景とともに展開してきたものである。

こうした開発と近代化を結ぶ視角との関係のなかで、今日アフリカにおけるさまざまな開発の場面において、「市民社会」の形成の重要性が語られる

が、同時に、「アフリカ」という磁場と触れ合うなかで、ヨーロッパ社会を淵源とするような「市民社会」論は大きな変形を経験している。遠藤がエケの議論を借りてアフリカにおける市民社会論のひとつの流れを指摘するように（遠藤 [2001: 147-160]）、アフリカにおいては、市民社会論を「民主化」というような西洋流のリベラルな政治学のなかにある公共性なるものの関係だけでとらえようとしても、「民主化」を討議する個人のなかに、家族や親族の紐帯が深く絡まりあった世界としてのアフリカに展開する「市民社会」的空間には届かない（Ekeh [1992]）。アフリカのなかでは、エスニック・グループや血縁・地縁を含めた組織に支えられた、通常の「市民的公共領域」を越えた「政治空間」のなかに、民主化や公共空間の形成を語り、そういう理念を掲げる多数の「市民社会」的な組織が存在しており（遠藤 [2001: 147-160]）、これはアフリカの社会動態のなかで重要な意味をもって機能していると考えられる（Kasfir [1998a, 1998b]）。

しかしこれまで、このような「原初的公共領域」（遠藤 [2001: 151]、Ekeh [1992]）といえるものとそれと関係づけて社会変容をとらえることは少数者の言及にとどまってきた。日本人による研究のなかでは、アフリカ都市の住民組織におけるインフォーマル・セクターの役割に着目し、生活集団の生きがいや幸福という住民の「実存」に光を当てて、社会開発におけるその創造的側面を指摘してきた松田などの論考に限られる（松田 [1999: 229-231]）。

一方、近代化論という文脈のなかで市民社会論を位置づけようとしても、まず、アフリカの市民社会の培地としての都市、さしあたりその都市化のプロセスを検討するなかで、きわめて困難な状況に出くわす。都市化は共同体から離脱した個人を生み出すはずであったが、独立後10年たっても、「脱部族化」した市民は出現しなかったし、ナイロビやナイジェリアなどの大都市においても民族的紐帯は解体されるどころか、むしろ強化されるということがみられた（松田 [1999: 199]）。

とりわけアフリカ農村共同体と近代化論の間にある軋みは、ほかの社会と比較しても、その共同体がとりわけ近代化を拒む障壁となるものであるとし

て、赤羽やハイデンによってそのユニークネスが指摘されてきた（赤羽 [2001], Hyden [1980, 1983], ハイデン [2007]）。

赤羽はアフリカの農業共同体の土地占取様式のあり方から、アフリカ農村社会におけるユニークネスを位置づける。従来の農業共同体が、「地主—小作」などの階層差のある地縁集団に支えられていることを前提としているのに対して、赤羽は、アフリカのこの土地占取様式をとらえるにあたって、それが、血縁団体内部における人間関係および血縁団体内部に支えられていることをあげ、それを「部族的共同体的土地占有」として定式化する（赤羽 [2001]）。そしてこのようなアフリカにおける土地占取様式のなかでは、私的所有が育たず、それを前提とした近代化が展開しえないことが指摘される（赤羽 [2001: 67-262]）。

一方ハイデンは、アフリカの農民を国家にも市場にも「捕捉されない」農民であるととらえ、その捕捉されない内部メカニズムの核に、互酬性のひとつのあり方として「情の経済」の存在を位置づける（Hyden [1980, 1983], ハイデン [2007]）。それは、「分与の経済」とそれによって紡がれるひろがりのある親族のネットワークのなかに生きるアフリカの小農世界を示すものであり、そのなかでの流動的・可変的家族形態と付合するものを有している。共同体のあり方のアフリカ的特質を取り出そうとする点においては、上記の赤羽の視点と重なるものである。

アフリカ農村の近代化への非接合ともいえる関係は、とりわけ1990年代以降、世界的に標準化された構造調整策の後で、それへの対応として生じた、離陸する東南アジアに対する停滞し続けるアフリカという状況のなかに現れている。「発展の兆し」のある東南アジアなどでは、経済の離陸を目指す外的な開発に対して、農村内部でも「緑の革命」にみられるように、ある意味では過剰に反応してきたのに対して、アフリカでは同じような政策過程でも農村は、開発の底に沈み込み、そうした外からの開発の動きにむしろ非接合の状態を作り出してきた（杉村 [2004: 9-10]）。

ただしとりわけ1960年代の後半にこの問題に着手し、内部視座から日本の

市民社会論と連関するひとつのアフリカ農村の住民組織理解のプロトタイプを作り出してきた赤羽の時代状況と比較すると、以下のような点に差異が認められる。

第1点として、今日の市民社会論のなかの公共圏論とかかわる共同体のあり方として、その後のアフリカ農村社会研究蓄積によって認められるようになってきた、より流動的に再編していく開かれた共同体としての特質との関連を再検討する必要があることである（峯 [2003: 193-195]、池野編 [1999]）。第2点目としては、フィールドワークにもとづいてアフリカで積み重ねられた農村社会の研究は、生産よりも消費にもとづくような共同性、分与の経済、再生産的志向を示す生活のあり方を明らかにしてきたことがあげられる（杉村 [2007a, 2007b]、ハイデン [2007]、阪本 [2007b]、掛谷 [1974]）。

最後に、近代化論そのもののゆらぎであり（ベル [1975a, 1975b]、山崎 [1987]、佐和 [1997]）、第三世界の内部においても、西洋的な近代化をモデルにした、外発的、産業主義的なこれまでの発展論に対して、もうひとつの発展、持続的発展や内発的発展というような視点が広がってきており（西川 [1989]、鶴見・川田編 [1989]、阪本 [2007a]、Sakamoto [2008]）、こうした論点との関連で「市民社会」論そのものの位置を再検討する必要もでてきていることであろう。

20世紀の近代化ゆえに引き起こされた環境問題や南北問題は、これまでの近代パラダイムを越えていくことを要請しており、ゆるぎない近代の価値規範から下された「遅れた」世界という見方にも変化の兆しが見られる。たとえばエネルギーを最大利用する高エネルギー社会を進んだ世界としたこれまでの見方に対して、エネルギーを抑えた低エネルギー社会こそが今日ではむしろ未来的な生き方として立ち現れてきている（ノルゴー／クリステンセン [2002]）。

また、このような「生産力」を超える価値指標のなかには、国民総生産量（GNP）という考え方に対する代案として、国民総幸福量（GNH）というような考え方も提起されている（杉村 [2007c: 236]）。物的生産至上主義とは異

なる、自然や人の共生の視点に立つとき⁽¹⁾、これまでとは異なるもうひとつの豊かさを示す社会として、アフリカの小農世界があるひとつのリアリティをもちはじめているのである（杉村編 [2009]）。

小稿は、以上のような近代化論、市民社会論、アフリカ農村にかかわる今日の問題状況を踏まえて、アフリカ農村に形成されてきている自生的な「市民社会」的な空間を、「公共圏」という視点から取り上げるとともに、さらには「消費の共同体」というアフリカの「共同体」の特性に焦点をおいてその特質を検討する。そのなかで、事例としてはJICAによって行われたタンザニア・マテンゴ社会における技術協力の事例（JICA [1998], Rutatora and Nindi [2008]）のなかで⁽²⁾、伝統的組織原理としてのセングという社会慣行と開発の接合のプロセスを取り上げる。

セングは、もともとマテンゴの共同体の共食慣行や協議の場として機能する社会慣行であり、社会変容のなかで一旦解体したものであったが、上記のプロジェクトのなかでは突如、その言葉が蘇り、アフリカ的な内発的發展を支えるものとして重要な意味をおびることとなった（荒木 [2006]）。

筆者はこれまでアフリカ農村の共同性の特質を、消費の世界や分与の経済、再生産の仕組みとの関係でとらえてきた（杉村 [2004]）。そしてこのような契機によって作り出されるアフリカ農村の共同性がほかの地域社会と比較したときにみせる開かれた共同体（吉田 [1975: 7], 池野編 [1999], 峯 [2003]）を支える内部メカニズムを取り出してきた。しかしこれまでのアフリカにおける国家の開発政策は「生産」にばかり注目し、「消費」の次元が社会の形成において果たす役割の重要性は等閑視されてきた。

こうした「生産」志向の開発のパラダイムは、近代市民の精神そのものでもあった。しかし今日環境問題にみるように、生産の人間像の危機は、そうした問題がその精神によって成し遂げられた成果の失敗ではなく、むしろ成功ゆえに生まれるという側面がある（佐和 [1997]）ことが理解されてきている。それゆえかつてのように、無前提にそうした人間像を理想的な市民像としておくことはできない。

このマテングのプロジェクトのなかでは、こうした先進社会の市民社会のパラダイムの揺らぎと懐疑も睨みながら、アフリカ農村の在来の住民組織の組織原理と新しい市民社会の学としての社会開発が対話することになったのである。

ここでは、第1節ではアフリカの共同体を「消費の共同体」という視点から取り出すとともに、開発のなかでその困難と新たな可能性に関する論点を整理し、事例としてのマテング社会を位置づける。第2節では公共圏と共同体の関係をセングの世界を中心にマテング社会の事例のなかで検討する。第3節では前記のプロジェクトのなかでのセングの再創造について述べる。第4節ではアフリカの開かれた共同体と新たな公共圏のあり方の可能性を述べる。まとめでは、公共空間と共同性、アフリカの市民社会論との関係でこの事例を位置づける。

第1節 アフリカにおける共同体の特質とマテング社会

1. アフリカの共同体論と消費の共同体

日本のような定着農耕社会における農地と家族制集団の関係は、固定的かつ地縁的であり、しかも土地が家産として家族制集団の永続的な継承性を支える役割を果たして単位集団が明瞭化されている。そのような分析枠組みのなかで、先進社会が培ってきた農民経済の像のなかには、土地という家産を軸とした農家世帯の枠組みがある（米村 [1994: 119-135]）。そしてその視角の延長線上にアフリカ農村の家族制集団がとらえられる時、土地を軸とした永続性をもった経営体の像が、アフリカ小農世界研究のなかにももちこまれることになる。

しかしこれに対して、アフリカ農村経済研究においては、このまとまりのある経済体が、研究者によってうまく同定できないところに研究上の困難が

始まる。アフリカ農村における地域と地域集団の関係性に関しては、土地に強く規定されない流動性を帯びた社会集団のあり方が指摘されてきた。そしてこうしたアフリカ小農の流動性研究のひとつの軸となり、しかもアフリカ農村の経済研究の視角にひとつのパラダイム転換をもたらしたものは、1970年代以降のフランスのマルクス主義経済人類学の諸成果である（メイヤー [1977, 1980]）。マルクス主義の唯物史観は「経済的土台が一元的に上部構造を規定する関係」と理解され、またそのパラダイムが、その研究を物質的生活に押しとどめる傾向を作ってきたといえるだろう。しかしアフリカ農村の経済研究は、こうした視点をもって対象に臨んだ研究者に、認識上の大きな困難をもたらし、そのパラダイムの変更を迫ったのである（湯浅 [1984: 31-53]）。

アフリカの農村の現実においては、「経済」（坂田 [1991: 62]）は、親族関係と社会組織、さらには宗教制度が不可分の関係として社会生活の隅々にまでくみこまれており、そこでは、「経済」をほかの社会関係と切り離してとらえることが困難である。このようにアフリカ農村の内部からその生活の様態をとらえなおすとき、経済システムにおいて、物質的基盤よりも、親族システムが支配的な役割を果たすように見える世界が浮かび上がってきた（湯浅 [1984: 41-47]）。これはいわば、従来のマルクス主義における上部構造と下部構造の関係を反転させるようなものである。

一方、ポランニー派経済人類学のサーリンズは（サーリンズ [1984]）、「未開の経済」の消費の重要性を示唆し、そのなかでは、食物は分けられるということだけではなく、分けられることによってつながれる人間関係が、生活体としての家族制集団を作るという視点を提起している。筆者がかつて詳細な検討を行った熱帯雨林下の焼畑農耕民であるザイール（現コンゴ民主共和国）・キンサガニ周辺のクムは、まさに土地に規定されない社会であるとともに、その社会は「共食」という慣行に手繰られ、作り出され、そのなかに共同性をはぐくむ「消費の共同体」というべきものであった（杉村 [2004: 27-180]）。

クムの農村の地域集団のなかで8～9世代という深い世代深度のリネージのなかから分岐した最小リネージであるトアは、1日に2回共食する。村人はまずこの共食の集団の成員として認知され、位置づけされる。この集団はその内部の世帯数が増加した場合には新たに集団を独立させたり、成員が減少した場合には、親族距離の遠いリネージと再統合などを果たしたりしながら集団を再生産していく。クムの農村では、村の世界は、このトアの連合体として維持されるとともに、トア間の調査のなかで必要な土地が配分される。このような村の生活は、消費によってつながれる集団によって流動的に組みかえられていく⁽³⁾。

このような共同体の組織原理は、日本の村落共同体にみられる土地の所有を軸にしてつながれる閉じた集団によって構成される「生産の共同体」とは大きく異なり、いわば開かれた「消費の共同体」という特質を有している。以下では、すでにみてきたような「消費の共同体」によって手繰られる、アフリカの農村社会のあり方の地域的特性をとらえるとともに、そのなかで、小稿の中心の対象であるタンザニアのマテンゴ社会の位置取りを検討してみよう。

2. サバンナと熱帯雨林の間——マテンゴ社会の位置取り——

タンザニアのサバンナや乾燥疎開林に位置するアフリカの農村と、これまで筆者が中心的事例としてきた熱帯雨林下のキサンガニ周辺焼畑農村と比較すると、その間には大きな社会構造の違いも存在する。すでにクム社会を中心事例として検討してきたザイル（現コンゴ民主共和国）・キサンガニ周辺の焼畑農村は、ひとつの村落に関してみれば、8～9世代に遡る厚いリネージに支えられ、制度的な「共食」慣行に支えられて今日も展開している。また、比較的近隣に親族集団が共住しており、社会的移動を行わなくても、日常的な相互扶助活動を展開することができる（杉村 [2004: 385]）。したがって、キサンガニ周辺のクム農村の日常の生活においては、人々の頻繁な往

来は認められず、かなり固定的なメンバーによって集団型の「消費の共同性」が展開されている。

それに対して、東アフリカ・サバンナ地帯の散居形態の村落社会においては、掛谷がタンザニア・トングウェ社会を通して描き出したように、日常的に訪問しあうような住民の流動性のある生活が営まれており（掛谷 [1974: 84-85]）、そこではネットワーク型の「消費の共同性」が展開している。また、乾燥疎開林での研究として杉山が描き出した、ザンビアのベンバの小農世界でも、「世帯」の構成員がつねに変動することが特徴的である（杉山 [2001: 269]）⁴⁾。以上のように、同じアフリカ小農世界でもサバンナの農民生活は、キサングニの森林域と比較する時、より流動的なネットワーク型の組織原理が卓越するという特徴を有している。

小稿において集中的に検討するタンザニア・マテンゴ社会は、熱帯雨林下の滞留する集団構成と対比すると、サバンナや乾燥疎開林の流動的な社会の組織原理を背景として生まれている。同時に興味深い点は、タンザニア農村のなかでは、農業集約的かつ人口密度の高い社会として知られてきたことである。そして後述するようにマテンゴ地域社会の創生のプロセスのなかでは、ひとつの地域社会のなかに四方のさまざまなエスニック・グループが流入し、地域社会は混住する集団によって作り出される。そしてこのようないわば「都市的」ともいえる状況のなかで、集団間のコミュニケーションを必要とする社会が作られている。

3. 消費の共同体の歴史的位置

小稿が主要な対象とするタンザニア・マテンゴ社会の場合も、その内部に包摂することになる前記のようなアフリカの「消費の共同体」は、とくに経済発展の側面といった点から、国家による近代との接合に多く失敗してきた。近代のパラダイムは伝統社会一般からではなく、重層化し、国家という制度に支えられて生み出されてきたものであり、農村社会を貢納を義務づけられ

る「生産の共同体」としてしかみてこなかった。そして、経済動態の地域的差異を含みながらも「生産の共同体」を背景とした社会は、さまざまな地域差を孕みながらも離陸していったのである（杉村 [2004]）。しかし、とりわけ停滞するアフリカ社会の中心にある農業・農村においては、「消費の共同性」に支えられた生存維持的な志向が強く、市場にも国家にも「捕捉されない」社会としてその立ち遅れが際立った。

現在のアフリカは植民地の歴史を潜り抜け、さらに今日ではグローバリゼーションのなかにおかれ、大きな変容を経験している。植民地化以降のアフリカの歴史をみるならば、確かにケニアやローデシアなどのように多数の白人入植者によって、大規模なプランテーションが形成され、アフリカの伝統的小農がかなりのレベルで改変されたところもある（吉田 [1978], 星・林 [1988]）。また、植民地時代のきわめて厳しい徴税制度によって、農村社会に大きな歪みをもたらされたことも事実であろう。

しかし、アジアやラテン・アメリカなどとの比較においてアフリカをとらえるならば、農村の伝統の根幹にかかわる土地保有の制度なども含めて、アフリカには、植民地以前の伝統が深く残されてきたことも多くの論者の認めてきたことだといってよいだろう⁽⁵⁾。そして歴史的にイスラームの影響を受けて、王国を生み出してきた西アフリカの世界などの社会も存在しているが、アフリカ以外の地域との比較のなかでみると、無頭制（松田 [1997: 311]）といわれるような、上山 [1966] がかつて人類史を俯瞰して図式化した「自然社会」⁽⁶⁾と重なる世界が広範に展開している。本来自然社会のなかに内包されるアフリカの農村社会においては、貢納制度もなく、一義的に横のつながりとその分与の経済のなかに自らの安寧を形成してきた。「消費の共同体」に支えられた、その徹底的に生存維持的方向に仕組まれた農業のあり方は、近代世界のなかで、余剰を作り出し、外部社会に対する商品化を進めていくためには困難なパラダイムをそのなかに内包しているのである（杉村 [2007c: 335]）。

小稿の中心事例のマテンゴ社会が位置するタンザニアにおいては、かつて

のウジャマー社会主義の精神との関連で行われた政策の誤謬、とりわけ、アフリカの精神として取り上げられた「ウジャマー」のなかからははずされた「消費の共同性」が重要である。「家族共同体」を中心にしたウジャマー社会主義。それはタンザニアの社会主義にもとづく内発的な発展を試みるものとして、植民地から独立した多くのアフリカの諸国にとっての、社会発展のひとつの理念であった。「ウジャマー社会主義」を提唱するニエレレ大統領は、次のように述べている。「『ウジャマー』、すなわち『家族愛』はわれわれの社会主義を表現している。……。近代のアフリカ社会主義は、『社会』を基本的家族単位の拡張として考える伝統的遺産から引き出しうる」（杉村〔2004: 442〕）。

ウジャマー社会主義においては、政策の理念はともかくとして、その政策の具体的な実践においてなされたことは、散居形態のタンザニアにおいて、集村化による近代化のためのインフラ整備をするものであった。このようにウジャマー社会主義は、理念としては、「ウジャマー」に立脚しながらも、社会主義を媒介とした農村近代化の道を探ることであった（杉村〔2004: 442-443〕）。タンザニアにおいても、中国などの先進の社会主義国に範を取って散居する農民の集村化を図り、「生産の共同体」とそれにもとづく農村の近代化を推し進めるものであった。

たとえば筆者がタンザニア・キロサ周辺の村人に対して行った聞き取りのなかで、村人が否定的に語ったことのひとつはウジャマー政策のなかで強行された上からの共同労働の強制である。村の伝統のなかにも、必要な場合、ある人の農作業などを共同で助けることは存在したが、制度化されたものではなかった。このような状況のなかに、「生産の共同性」を生み出すものとして義務化された共同労働のうえに立って、その労働の生産物を搾取するような事態も起こり、そうした伝統のない農民社会を混乱させることになった。ウジャマーの政策的試みのなかでは、「生産の共同性」にのみ焦点が当てられ、ウジャマーの精神を掘り下げていけばそこに容易に見出すことのできる、「分与の経済」に支えられた「消費の共同性」が背後に追いやられたのであ

る⁽⁷⁾。このような「生産の共同性」に働きかけようとする多くの開発の事例とは異なり、1999年のJICAのプロジェクトでは、在来の知を問ひ、その内発的発展のポテンシャルを取り上げようという視角をもつことによって、「消費の共同性」にもひとつの焦点が当てられることになった（馬淵・角田[2004]）。

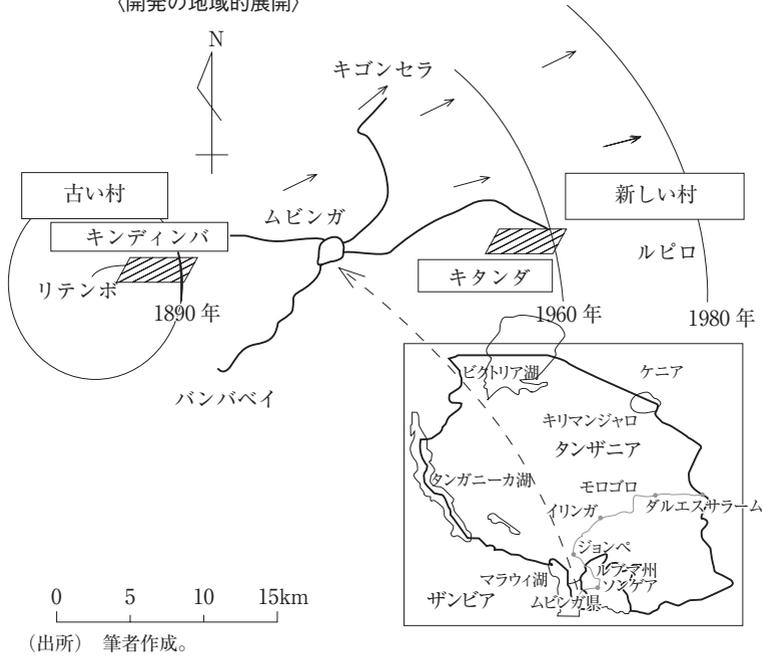
小稿では、以下で詳述していくように、マテンゴ社会における消費の共同体に支えられたセングの存在の社会的政治的側面、そこに育まれる住民の対話の場や公共圏のありように着目し、アフリカのなかにある「市民社会」のあり方を主題化する。

第2節 消費の共同体における公共圏のかたち

1. マテンゴ社会の生態

タンザニア・マテンゴ社会は、急峻な山地にアフリカ農耕社会のなかではとりわけ高密度の人口をかかえ、ンゴロ（掘り穴耕作）⁽⁸⁾やコーヒー栽培にみられる集約的な農業を行う集団である。マテンゴ社会には、図1に示されるように、開発の歴史の古い高地と開発の歴史の浅い低地の違いがあり、農業集約的かつ人口密度の高い古い村と農業粗放的で人口密度の低い新しい村というように、土地利用の集約度と人口密度などにおいて大きな差異が認められる。また社会構成においても、高地（キンディンバ）には老人層を含む年長者が多いのに対して、低地（キタンダ）には、若年層が多いという特徴がみられるという違いがある。このように共時的な農村形態をみれば、マテンゴ社会のなかには、社会・文化的にきわめて大きな差異が認められるが、すでに述べたような新しい村の再編の様式も基本的に古い村のあり方を踏襲したものであり、集落は人口増加によって一種の遷移現象を重ねながら、時代を重ねることによって新しい村は古い村に近づいていく。

図1 マテンゴ社会における新しい村と古い村
 〈開発の地域的展開〉



(出所) 筆者作成。

次に村落内部の伝統組織のありようについて取り出しておこう。マテンゴ社会における村落形成の大きな特質は、ミクロな村落レベルでも地域集団がひとつの血縁集団からなる社会組織にはなっていないことである。すなわちマテンゴ社会では、コミュニティ・レベルの地域社会が、3～4世代の拡大家族をユニットとした異質な血縁集団の緩やかな連合体として組織されている。村落内部では、各単位集団が、ひとつのンタンボ (*Ntambo*) という山裾の水系間で挟まれた小さな一尾根の領域を占有している。マテンゴ社会において、ンタンボは、今日においても地理的な基礎的単位として機能するとともに、同時に社会的基礎的な単位として機能している。マテンゴの民族生成史ともかかわると考えられる (Basehart [1972, 1973], Schmied [1988]), 地域集団の編成の様式は、人口増加を契機としており、マテンゴ人の生活様

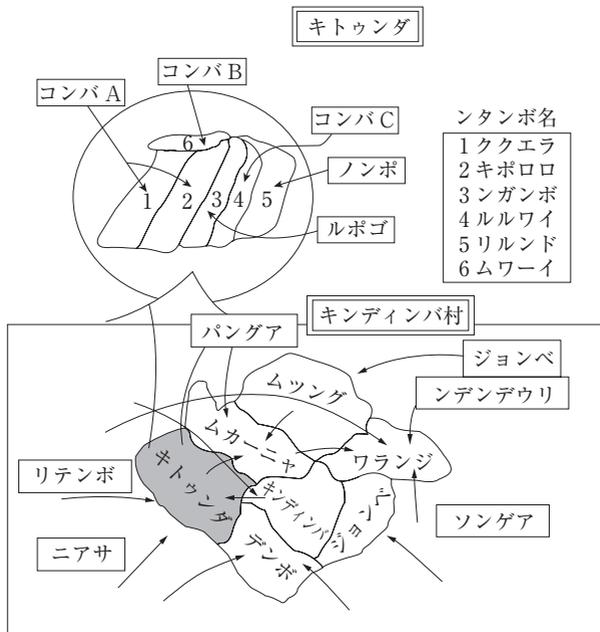
式や行動様式の社会経済的背景を作り上げている（加藤 [2002: 94]）。

2. 村落形成とンタンボの意味

ここでは、古い村のひとつであるキンディンバ行政村を事例として取り出してみよう。タンザニアのなかでもキリスト教の普及は早く、キンディンバ村には1909年にカソリックの教会が作られ、それによって学校教育の端緒が作られ、1930年に学校教育のほかに識字教育が行われるようになっていく。しかし当時のマテンゴ社会は、いまだジュンベ・マプータという伝統的リーダーの統治下にあった。

キンディンバ行政村は1996年の時点で、図2のように、キンディンバ

図2 キンディンバの村落構成



(出所) 筆者作成。

(Kindimba), キトゥンダ (Kitunda), ムカーニヤ (Mkanya), ムツング (Mtungu), ワランジ (Walanzi), ジョンベ (Jombe), デンボ (Dembo) の7つのキトンゴジ (集落) からできている。このなかでおそらくキンディンバ, キトゥンダ, デンボがもっとも古い集落である⁹⁾。図2では, 集落の名称に加えて, 各集落の出自となる地域やエスニック・グループの名称を, それぞれ四角枠内に示した。ここからも, キンディンバ村の地域社会は, 広い地域, さまざまなエスニック・グループの人たちによって構成されていることがわかる。

マテンゴ社会の大きな特質は, 村落の内部構成という視点からみると, 村落内部の各地区がひとつの血縁集団ではなく, ひとつの地区をとっても異質な血縁集団の緩やかな連合体によって組織されていることである。その基礎的な単位集落となるのがクランごとに形成されるンタンボである。村落の開発において, 一般的に最初にやってきた人は, 山腹にンタンボを形成するためにその中腹に居住する。マテンゴ語でかつてはルペンビ (*Lupembi*) と呼ばれたンタンボは, 拡大家族やクランが生計を支えるのに十分な土地という意味である。

ここではまず, 図2の上部に示されるように, このンタンボと村落形成の関係をキンディンバ村のキトンゴジのひとつ, キトゥンダでみてみよう。キトゥンダには6つのンタンボがあり, そのなかにひとつふたつの10軒組が組み入れられている。キトゥンダの最古老の1人の話によれば, その開発過程はククエラ (Kukuela) のンタンボに始まりのちにコンバ (Komba) クランの人々によってキポロロ (Kipololo) のような隣接のンタンボにも拡大していった。同時にキポロロのンタンボに隣接するンガンボ (Ngambo) のンタンボは, ルポゴ・クランによって開発されたが, 当時ンガンボやリンドのンタンボは深い森林に覆われていた。ンガンボはルポゴの家族, コンバの家族集団によって占拠されている。リンドはノンボクランによって占拠されている。

このようにマテンゴ社会においては集落内部のそれを構成するンタンボの

レベルにおいて異なるクランが占拠するように、エスニック・グループが混住した状況がマテングの村落形成の基本的パターンとなっている様態を取り出すことができるだろう（杉村 [1999: 138-140]）。このような村落の集団構成の特質は下記のような村落形成のプロセスと深く連動している。すでにみたように、マテング社会の古い村と新しい村では、ンタンボの占有というかたちでの開発がされはじめた時期に違いがある。しかし、開発がいったん始まると、その地域での開発過程は、多かれ少なかれ、同時に進められる。最初は人口が希薄で、土地が未利用のまま残されているようにみえるが、ほかの地域から来たさまざまなクランによって占取されたンタンボが新開地の各ンタンボの周りにパッチ状の形で広がる。それゆえ2世代、3世代経ち、家族の規模が増加して、そのンタンボでの可容人口を超えたとしても、ンタンボ内に占取することのできる土地をみつけることはできず、村落外に新たな土地を探さなければならない。土地を求めて移住することによって、人々の混住が進むのである。

3. セングの原像

キトゥンダのひとつのンタンボであるンガンボは、内部を上下に分かつ2つの10軒組（ニェンバ・クミ・クミ）から構成され、全戸数32軒、138人が居住している。ンガンボに在村する長老カスパー・ルポゴ（Kaspar Lupogo）氏（77歳）からの聞き取りでは、地域への人口の流入は氏の祖父カピティラ（Kapitira）の時代に始まり、ほぼ1900年前後に遡ると考えられる。もともと、祖父の家族、両親、兄弟も含めて、今日のキンディンバ村のキトンゴジのひとつであるキンディンバを構成するひとつの10軒組、ムクユ（Mukuyu）に居住し、彼の祖父も、父ホルマス（Holms）もムクユで生まれている（JICA [1998: 217]）。

しかしムクユの人口が稠密になり、新たに土地をみつける必要が生じ、ンタンボ・ガンボを開墾地としたのである。今日のキンディンバ村はすべての

土地が何らかの形で利用されるものとなっているが、当時は、まだ人口も希薄であり、手付かずの状態の森林が広がっていた。ンタンボ・ンガンボの開発は、まずこのカスパーの祖父とその息子たちによって現在ンガンボのある地域の中腹からその下方に向かって始められていったと考えられる。ンガンボの開発過程は、今日新開地のキタンダなどでみられるように、草分けの父祖を囲む、息子、男性の孫たちが集住して暮らす、共住同族集団としての社会集団ムシ（Musi）が形成され、かつてはそのなかでひとつのところに集まり、共食し、話し合うセングが行われていた（JICA [1998: 218]）。

そしてこのンタンボ・ンガンボに関しても、カスパーの祖父や父が生活していた時代には、ンタンボ内の上方の土地にはまだ未開墾の土地が残っていた。具体的にはどういう契機によってかはまだ明らかになっていないが、この時代にルポゴ・クランとは異なるコンバ・クランの人たちが、その領域をンタンボ内の小ンタンボとして占有し、この2つのクランは、ンタンボの内を2つに棲み分けて、それぞれの領域内での同族集団による開発と世帯数、人口数の増加を重ねていった（JICA [1998: 218]）。

村人はムシ⁽⁹⁾といわれる数世帯単位の拡大家族で、セングと呼ばれる共食慣行を行っており、この時代には自給的生活の単位は世帯よりもこの拡大家族にあったといってもよいだろう。セングでは、ンタンボのなかの集落に住む人々が食事をともにしながら話し合い、時にさまざまな問題の解決策について議論したという。その話のなかには、結婚の相手をどのように決めるか、ンゴロの的確な作り方はどうかなどということが、長老から語られていき、若者は自由に質問をし、議論が展開されていったという。「セング」ということが話題となった時、村のある長老は驚くような顔をして、「セングはマテンゴのもっとも深いものだが、どうして知っているのか」といった⁽¹⁰⁾。

このセングは、1940年代以降制度的なものとしては、消失して行き、多くの村人はセングという言葉さえ忘却するようになって来ていた。一方マテンゴにおいてンタンボというかたちである集団が占有する土地は、だいたい3～4世代の家族の生活が可能なる土地の広がりであるが、それでも男子の子ど

もが続けて生まれるような場合はンタンボ内には土地がなくなり、ひとつのンタンボを越えて地域内での未開墾地が開発される結果、その地域全体の土地利用の集約度が平均的に高まっていく。

このような人口の増大は、キンディンバ村内の各ンタンボ内の可容人口数との関係で1940年ぐらいにはすでにひとつの臨界点を迎えたと考えられ、その後今日まで、ンタンボ内の世帯数も人口数もそれほど大きな変化はなく、一種の定常状態が展開してきたのだという¹²⁾。1940年代に入るまでの伝統的な暮らしのなかでは、すでにみたようなンタンボをひとつの生活領域とした村の生活があり、そのなかで、内部の自己組織化を図る母体となったのがムシという大家族であり、その集団の紐帯となる共同性を作ったのが、セングという社会慣行であった。この社会慣行が解体する大きな契機となったのが、1930年代から急速に村の内部に展開していったコーヒー栽培である。

コーヒー栽培は世帯ごとに経営内容が大きく異なり、それぞれの労働時間を高め、生活の個別化は展開していった。このコーヒー栽培によって共食の慣行は解体され、ムラごとのリーダーの不在という状況になった。このようななかで、世帯ごとに家屋の周りにコーヒー畑を設け、さらにその周りにンゴロ畑を作るといった個別の利用状況が生まれ、ンタンボをセングのメンバー全体の合意のもとに利用していくという状況がなくなったのである（杉村[1999: 145]）。

4. 消費の共同体における公共圏のかたち

かつてセングが存在していた当時、セングは各ンタンボのなかで、1つ、2つ行われており、ムシを単位として分けられる大家族の成員たちを中心に1日1回の共食が行われた。そしてセングの世界のなかで培われていった価値観は、制度としてのセングが解体した後も、マテングの社会のなかで「歓待の風」という日常的な慣行として残されている。生活集団の内部でのもてなしというよりもむしろ外部から来る人を過剰ともいえるかたちで引き

供応するという習慣として、セングは残されているのである。ここには、村落の各ムシ間やより広域的な人とのつながりを積極的につなぐ場として機能してきたセングという伝統的な慣習的行為のあり方が現代的なかたちで再生産しているということもできるだろう。

もともとセングは、成員間のコミュニケーションを図り、さまざまな問題を話し合う場でもあった。村の長老の話では、セングは、コミュニティの成員によって支えられているが、同時にほかのンタンボの人たち、また遠隔から来る人たちも絶えず集って議論を交わす場であったということであった。したがって、セングはひとつのパブリック・スペースとして伝統社会のなかの公共圏を形成するものとなっていたといっただろう。村のなかの各地域における公的領域は、マテング社会においては共に食事をする共食の場、つまりセングと重なっていた。マテング社会のなかでの公共圏を形成するセングのこのような機能は、すでに述べてきたような、筆者がザイルで研究してきたクムの共食の場としてのトアが果たしてきた機能と類似している(杉村 [2004])。

マテング社会のセングの場もクム社会のトアの場も消費の共有に支えられた公共圏であり、そこに「公的領域」「公共性」が生み出されている。クム社会の共食の場は、すでに筆者が多くの論稿で指摘してきたように、コミュニティの平等性や対等性を直接作り出すものであり、社会の差異化を防ぐものである(杉村 [1994, 2004, 2007b])。またマテング社会におけるかつて存在した共食の場としてのセングの伝統も、村の問題、家族内の問題を徹底的に議論しコミュニティ内の了解を促すものとして機能してきた。

このような共に食べるということを前提とし、そこで展開するアフリカ小農世界の公共空間のあり方と論理は、近代の「討議的民主制」といわれるような、意見の論理性にもとづく「公共性」の獲得とはかなり異なった様相を展開する。筆者がクム人のムラで調査しているとき、「一諸に食べないでひとりでごっそそ食べているようなやつはムロジなんだ」という話を聞いたことがある。ムロジとは、邪術者のことであり、呪いをかけ、病気やほかの多

くの不幸をもたらすものごとであり、村人はムロジを恐れ、それゆえムロジに強い関心をもつ。

このような「邪術者」の存在は、ひろくアフリカ農耕社会のなかで知られているが、そのような背景には、災凶を人と人との関係のなかにとらえ直す農民の世界観が存在する¹³⁾。また掛谷は、自然社会としてのアフリカ農耕社会の平等主義と呪いとの間接的連関を、トングウェ社会の事例で克明に描いている(掛谷 [1977, 1986, 1994])。マテング社会においても、そのような社会のひとつとしてある不幸が起こったとき、それを誰かがやらせた、誰かが呪いをかけたと考える。そして呪いをかけた人は、マテング社会においては、親族や近隣の人、日常的な関係をもつ人の場合が多く、ときには妻や夫の場合もあり、さらには親が子を呪うということもあるといわれる¹⁴⁾。

「邪術者」を抱くアフリカ小農世界が見据えるものは、人の言葉の裏側、仮面をつけながら生き抜く人間とそこに紡がれていく社会関係の綱目といってもよい。それゆえアフリカ農民は、言葉を越えて、信頼を生み出すものとしての、「共に食べる」という日常の実践に身を寄せていく¹⁵⁾。

マテングに制度としてのセングの存在した時代、セングはムシなどとともにあるリネージにもとづく拡大家族をたばねるひとつの核であった。しかし同時に、セングは、外部に常に開かれた受け入れの場でもある。セングは、ンタンボを越え、村を越えて、そこを多くの人が訪ね、そこで食を共にし、議論を重ねる場であった。村のなかに開かれたコミュニケーションの場を渡り歩きながら、村の内部の「公論」が展開し、セングの内部と外部をつなぎ、セングをも結ぶ開かれた自生の場があったということができよう。

もとより今日においては、かつてのマテングのセングの伝統を直接の体験としてとらえることはできないが、現在のさまざまな論議の場面でみせる、参加者が納得するまで繰り返し議論を重ねるといったような事柄のなかに、かつてのセングの伝統を見出すことがある。筆者が参加したムラの内発的發展をめざすための住民の集会は、ファシリテータ主導のもと、村のさまざまな問題を洗い出し、そこから発展の道筋を取り出そうとするものだった。

そのなかで問題をめぐって意見が百出するが、とにかく多くの人が意見を出すのを楽しむというような雰囲気の中で展開した。日本人の議論の感覚でいえば、もう少し結論を早く出そうとする方向に行こうとするのだが、多くの人が意見をいうというプロセスが重要であり、そのプロセスのなかでそこに参加する人が相互の差異を了解しあうというような趣きであった。朝から夕方近くまで話し込んでとくに結論は何もなかったのだが、多くの人は、たくさんの議論ができたことを喜び、「今日はいい仕事ができた。またやろう」ということになり、参加した人全員に食事が振舞われ、「共食」の場が開かれたのである。

第3節 セングの再創造

1. セングの蘇り

1999年のプロジェクトに先がけて行われた、1994年からのJICAの研究協力プロジェクトである「ミオンボウッドランドにおける農業生態の研究」(JICA [1998])が始まった時は、マテング社会において、セングという慣行は、すでになくなったものとして、マテング人の記憶の片隅にかすかにとどめられる存在であった。筆者がこの言葉と出会ったのは、1996年、プロジェクトがマテング社会の古い村のひとつキンディンバに中心的な研究サイトを設けて、コミュニティ・レベルでの詳細なフィールド調査を行った時である。

すでに述べたように、マテング社会のなかにも、今日ではキトンゴジという行政単位があり、それが10軒組という単位で把握されている。しかしこれは独立以降のウジャマー社会主義のなかで行政組織として、上から構成されたものだ。しかしそうしたものが作られる以前にもマテング社会のなかには自生的な政治組織が認められ、それを末端で構成するものとしてムシという

集団が存在していた。ムシはすでに述べたように、いくつかの世帯が集まったものであり、この紐帯を作り出すものがすでに述べたようなセングという社会的慣行であった。マテングのなかで、眠っていたセングの記憶が蘇ったのは、この地域でのJICAによる技術協力のプロジェクトのなかであった。その活動のひとつに、人口約3000人のキンディンバ村における小型のハイドロミル（水力製粉機）建設事業を通じた「参加型開発」の試みがあった。ハイドロミルとは、河川の水力を利用し、水を高いところから落とし、その力を利用して粉碎機をまわす構造になっている。

マテング社会は急峻な山間に立地し、川の流量が少ないために、小型の小水力のハイドロミルをようやく導入し利用できる状況である。しかしこのハイドロミルの導入は、村人の生活改善の視点からは、高いニーズを有するものであった。マテング社会はほかの農村地域と比較するとコーヒー栽培などを通して現金収入も高いが、村人の暮らしは、基本的にトウモロコシやインゲン栽培などを通じた自給生活に依存している。そうした生活のなかで各世帯では、主な主食のウガリ（トウモロコシの練り粥）の材料となるトウモロコシを手つき杵と臼で粉に挽く作業は、女性たちに大きな労働の負担を課してきた。

村の生活のなかで土地所有などに大きな隔たりはなく、平等的な色彩の強い村であるが、一定の貧富の差もあり、上記のような状況に対して、村のなかでは10軒に1人ぐらいの割合で動力の製粉機を有するようになり、これは貧富の差異を示すひとつのメルクマールとなってきた。こうした機材をもたない農家の女性達は手つきの杵を日常的には使用しているが、現金の余裕のある時には、近所の機材を有する農家で使用料を払って利用している。

それゆえ、ハイドロミルは、村人全体の生活改善に結びつくものとして重要なものであるとされ、JICAによる技術協力のプロジェクトのなかでもひとつの中心におかれた。ハイドロミルの設置という社会開発プロジェクトの外部からのアクターとしては、ソコイネ農業大学地域開発センター（SUA Centre for Sustainable Rural Development: SCSRD）、県、カリタス（カトリックの

援助組織)が挙げられる。しかし内発的發展をめざすこのプロジェクトの核心をなすことのひとつは、住民側が主体としてどのように、そしてどのような目的のもとに組織化するかということであり、住民側の主体性と内発性が期待されていた。その社会開発に対する、内発的なその住民側のグループの組織化の重要な局面において、突如浮上してきたのがセングという言葉であった。

マテngo社会において行われた1999年4月からのプロジェクトに先がけて行われた、1994年からのJICAの研究協力プロジェクトでは、内発性を生かし持続的發展の視点からまず着目したのは、環境保全という視点から高く評価できるピット農法(掘り穴農法)であった。そしてそのピット農法を支えるより広域的エコロジカルな単位としてンタンボが焦点化され、ンタンボを単位とした發展プロジェクトが構想されていった。

ハイδροミルのプロジェクトが始まる段階では、プロジェクトはマテngoの在来世界に深く焦点を当てながらも、そこではまだ「生産」の在来性に軸をおいた視点であり、セングは調査としては発見されながらも、プロジェクトのなかでは後景に退いていたといつてよいだろう。それゆえ、住民にゆだねられたグループの名称の選択において、提案された、共食慣行として知られるこのセングという名前とその理念は、プロジェクトのメンバーには最初は意外性をもったものであった。

キンディンバの教会の集会所でハイδροミル・プロジェクトを推進するSCSRDのメンバーと教会、セング委員会のメンバーが一堂に会した集会で、セング委員会のメンバーであるK氏は委員会の名前となった「カマティ・ヤ・セング」の「セング」について述べている。

「彼らにとってセングは父祖の時代の伝統的な生活の制度であり、そこに人々が集い、村の日常の問題を話し合う場であった。家のなかだけで仲良く暮らすのもいいが、それだけでは十分ではない。家から少し離れたところに各世帯のメンバーの男たちが老人から子供たちまで集まって生活のさまざまな問題を話し合うことが必要だ。結婚について、農業について、それから少

し怠け者の子供をその場で諭すというようなこともする」。

またこのようなセングは、まぎれもなくひとつの教育の場であり、長老達がマテンゴのなかでの生活習慣、モラル、農業などに関する伝統的な知識や知恵を若い世代に伝える重要な場であった。このプロジェクトのタンザニア側の協力の母体となった、SCSRDの現センター長ルタトーラ教授は、この点を強調し、村の発展を目的とするプロジェクトのなかで蘇ったセングという言葉は、伝統的な知識や知恵の伝達の重要性を喚起し、また同時にそういう場を村に作り出すことの可能性を示唆している（Rutatora and Nindi [2008: 194]）。

同時にセングは、ンタンボを越えて行き交う人たちがつながりあう「場」でもある。マテンゴの世界では、ひとつの地域社会を構成する各ンタンボは、異なる出自をもった人達ごとに占有されている場合が多く、ひとつのンタンボの隣りには、異なる地域出身の人達が住んでいる場合も多い。セングは、そういう異なる人達がまずもって交流し、つながりあう場であったといっただろう。その「交流」の場で、マテンゴの村の共同性が生み出されていた。すでに述べたキンディンバ村でのハイドロミル・プロジェクトの委員会の創生に際してその名前に「セング」という名前を冠した動機として、「セング委員会」のメンバーのひとりには、「人々が集り、重要な課題を議論し、目的に向かってともに働く場にしたいということを考えたら、セング（という名称—引用者）以外に考えられなかった」と語ったという（荒木 [2006: 17]）。

2. 新たなセングの主体と力

この「カマティ・ヤ・セング」とハイドロミルのプロジェクトの名に付された「セング」は、もちろんかつての社会慣行であるセングの再生ではない。村の人のなかに記憶されているセングの精神は、農村において、社会開発という市民社会の形成を促す事業を行うにあたって、その参照枠として持ち出

されることで、新たな形での展開をみている。たとえば2001年に結成されたカマティ・ヤ・セングのメンバーは、荒木 [2006] が指摘するように、キンディンバ教区の議長と神父、村落行政官 (VEO)、村落自治メンバー、前農業普及員というように教会と行政の双方にまたがった再編成によって形成されたものである。しかし、彼ら自身がその精神はセングを受け継ぐと主張している。

キンディンバにおける社会開発において、このカマティ・ヤ・セングという名前が与えられ、村の開発主体が作られてから、このグループの開発プロセスへの参加と貢献は目を見張るものになった。ハイドロミルの用水路を開くための事業として、村落内部の遠隔地からも老若男女をとわず、数百人の人が駆け参じ、まさに村をあげての事業が行われた。手に鍬をもった男女は渾然と一体となって、息を弾ませながら水路の掘削の仕事に当たる一方では、頭に石を載せた女達が何処からともなくやって来る。その作業のなかにみる彼/彼女らの表情には、労働の場の苦役というよりは、祭りの場に参加する上気したにこやかなものであった⁽⁶⁾。このような住民のきわめて熱心な社会参加の背景としては、ひとつはこのプロジェクトが、女性労働の軽減というマテング人にとってもっとも重要なベーシックニーズとかかわるものであったことは確かである (荒木 [2006])。

しかしこのような地域経済のなかでの生活の向上ということに対する適合性以外にも、プロジェクトが「セング」という名前のもとに、統合され組織化された意味も大きいものがあると考えられる。そのひとつとして、「セング」という理念が村のなかの小さな集団の利害を超えた公共性、さらには、すべての人がそこに参加しようという開かれた場としてのイメージを人々に喚起することによって、村人の「われわれ」意識を掻き立てているともいえるのである。

もちろんハイドロミルの委員会としてカマティ・ヤ・セングが立ち上げられ、その手によって水路が開設されるなかで問題も起こった。そのひとつはほかの集落の人が作業を手伝っている一方で、ハイドロミルの設置予定場所

から少し離れた集落などが、「自分たちにはあまりメリットがない」ということでセング委員会に不信を示し、作業にも加わらないということがあった。しかしこういう不満をもつ人達に対して、「全体のため」ということを喚起する「セング」という名称を使うことで、プロジェクトの目的と「公共性」は、活動を推進する際に説得的なものになったとカマティ・ヤ・セングの中心メンバーのひとり K 氏は話してくれた。

今日のマテング社会においても、モノを分け、富者が貧者を支えること、また客人をもてなすことなどは、生活のなかで日常的なものとして展開している。セングというような制度としては行われていないとしても、老人から子供まで集まって食事をし、村のこと、各人の生き方のことを長時間にわたって話すことがあり、その場は誰もが参加できる「公共圏」として展開する。かつてセングという慣行を通して実現していた村の生活の規範、それを通じた生活のあり方は、現代のマテング社会のなかでも世代を問わず了解し合えるものだ。

「マテング社会の中にもともとあったセングの精神を、ハイドロミル設置作業、そしてハイドロミルを含んだタンボのマネージメントにまで生かしていきたいというのが、『セング委員会』の名前の由来であった」（荒木 [2006: 18]）と荒木は述べているが、かつてのマテングのなかにあった伝統的制度としてのセングは解体し、名前としては忘れられても、前記のようなセングの精神は、現代に生きるマテングの日常的な生活の規範のなかにもさまざまなかたちで刻み込まれている。プロジェクトの主体が、「セング」という言葉によって形象化されたとき、今日においてもマテング人のなかで現代化されたかたちで生きる、「セングの精神」とつながるような社会慣行と意識がそれに深く共鳴し、参画を後押しするものになったといえるだろう。

3. カマティ・ヤ・セングの活動と公共性

セングの名を冠し、その精神を受け継ごうという意味をもつこのようなマ

テンゴの住民組織のあり方は、社会開発の主体となる住民組織として、プロジェクト全体を通して突出した大きい意味をもっていた。なぜならプロジェクトのさまざまな活動が短期的に終了してしまうことが多いのに対して、後述するように、このカマティ・ヤ・セングの活動はきわめて多数の人を巻き込むとともに、その活動がJICAの活動終了後も今日に至るまで安定したかたちで続いている。それだけでなく、この開発プロジェクトは、公共性の高さという点で、キンディンバのほかの住民活動との間に質的な差異をもたらすことになってきた。

カマティ・ヤ・セングの活動以外に、マテンゴにおけるJICAのプロジェクトが推し進めた社会開発のなかから、2002年以降、養蜂、植林、養魚、低地利用など小さな活動が生まれた（馬淵・角田 [2004: 25-26]）。このような村落活性化のグループの組織化は、「キクンディ」（活動の集団）を組むという言葉とともに、タンザニアのなかでは、農村、都市を問わず、急速に展開している。

たとえばマテンゴ社会におけるJICAのプロジェクトのなかで、キンディンバと対照するためのもうひとつの調査地となったキタンダでは、養魚活動が、たくさんの小グループによって担われ、そのグループ間でも、稚魚の授受、魚網の共有・共用、技術の交換を通じて各グループが相互に密接に連携するシステムが構築されていったという。しかしこれは、セングの伝統とは異なり、もともとマテンゴのなかにあったゴケラなどの共同労働と重なるものであり、助け合いが強調されるが、一方でそのグループの利益のために行う排他性も存在する。

そしてキタンダでは、JICAのプロジェクトのなかにみられた小グループの農村活性化活動は、その活動集団に対して「ウジャマー」という名前が与えられた（馬淵・角田 [2004: 25]）。マテンゴの事業のなかでは、かつてのウジャマー政策の時のような外発的な共同ではなく、あくまでも内発性に軸をおき、村人にも評価されるものであったが、養殖や養蜂といったその生産的事業は、あくまでも「労働—生産」の共同に軸をおくという意味では、村人

がその活動に名前を与えるのに際して、かつてのウジャマーの政策の視角と重ねてイメージしたことがうかがわれる。

これに対してセングのプロジェクトのなかでは、ハイドロミルの製粉機の使用料がきわめて低額に抑えられていることから (Sugimura [2004])、村のなかの豊かな人も貧しい人も同様に参加できるものであり、その出発点においてはセング実行委員会のメンバーもボランティアとして働いていた。このような製粉機利用の動向は、援助期間が終了し、ハイドロミルの製粉機がタンザニア側に引き渡されて以降のものであり、キンディンバ村落内部の自主的な運用として展開しているものだ。

動力の製粉機を有し、富裕者に位置していた人は、ハイドロミル・プロジェクトのなかで、個人としての所得源を失うことになり、新たな仕事として豚の飼養を拡大するなどの方向を目指している。そうした状況のなかで、「住民全体の生活の向上」という大義のもとに住民を団結させるうえで、「セング」のイマジネーションは、富裕層の積極的な参加も促すひとつのメタファーとして、効果的に働いていたと考えられる。これは「消費の共同性」に支えられたセングという社会慣行のなかにあった、「共に生きる、そのために話し合う」という公共圏を作り出していた機能と重なるものである。またハイドロミルの利用はキンディンバの村人のなかだけに閉じたものではなく、遠路はるばる来ることをいとわないのであれば、村外者が利用することもできる公共性の高い場として展開しているのである。

もとよりマテングにおけるハイドロミル・プロジェクトは、かつてのセングを復活するものではなく、セングの名を冠することで、地域社会の価値に即して内発的発展プロジェクトを行おうとするものである。それはさしあたり、プロジェクトのなかでハイドロミルの創出というなかで使われるようになったものであった。しかし村人はその住民組織の名付けに際して、「カマティ・ヤ・ハイドロミル」というような即事的な事業形態に対応するものとしての名前をつけるのではなく、むしろその事業を通して村の長期的将来を見据えた、「共に生きる」というような意味を含むセングを付与したが、そ

うした住民の意図したものは、プロジェクト終了後むしろ次第に顕在化するものとなってきている。

ハイドロミル建設自身は比較的短期間に終了したが、その後の事業の重要な課題は、そのハイドロミルを村人自身がどのような視点のもとで自主独立に運用し、村の将来の発展のために生かしていくのかという事柄とつながるものになっていった。JICAのプロジェクトが2004年3年に終了し、外部からの財政支援がなくなった村人はこのカマティ・ヤ・セングのもと、完全にこの事業を自主運営するようになった。村の財源からみれば従前にはない規模の事業を滞りなく運営していくこと、また村の財源規模に匹敵するようなハイドロミルの使用料から得られる収入をそうした持続的運用のために公的に用いることと、その余りを村全体の活動にかかわる自主財源として、社会発展や福祉に生かすことが大きな課題となってきた。こうしたなかで、カマティ・ヤ・セングは「共に生きていく」という、そのプロジェクトに村人が託した期待に応えるかたちで、活動の管理運営をこなし今日に至るまで活動は安定的に展開している。

第4節 開かれた共同性と新しい「公共圏」の創生

1. 2つの「公共圏」論とアフリカ小農世界

以上を踏まえて、これまでの公共圏に関する議論と共同体の関係を再検討してみよう。かつての共同体論における共同体は閉ざされたイメージを有しており、そのなかの同質性がほかの地域とのコミュニケーションを考える際の前提となってきた。近代はこの閉ざされた共同体を解体し、住民をそこから析出させて、混住する都市の住民を生み出していった。近代市民社会とその規範としての公共圏はこうした歴史的過程のなかに見出すことができる。ハーバーマス [1973] が、市民的公共圏として取り上げたものは、すでにみ

た人類史の像からみると、西欧農業社会のなかにある階層的秩序が解体し、近代産業社会が成立していくなかで生み出されたものだ。この産業社会を支える中核としての近代市民が都市市民としてさまざまな業種や社会層からなり、その合意形成のための合議的な民主主義のなかに生きてきたことは周知のことであり、これが解体される以前の封建的秩序のなかでの社会関係と異なるものであることはいうまでもない。

しかし近代市民が有する能動的・主体的自我、生産的人間像は、ヨーロッパ内部にもさまざまな差異を含みながらも（トッド [1992, 1993]）、土地所有を内部化した農業社会を培地として成立したものである。農業社会に対してイメージされる閉ざされた共同体は、近代市民社会の成立に抗する社会として屹立する段階もあったが、その力が共同体の内部にまで及ぶや農村社会のなかにもあった、「労働—生産」的志向は近代社会を支えるものとなっている（杉村 [2004: 361-425]）。

近代社会のただなかで、生産する人間は、「本質的に剛直をむねとする存在であり、純粋な積極性と一貫した同一性を誇る存在」（山崎 [1987: 200]）であった。ハーバーマスは、近代の市民社会に芽生えた公共圏を喫茶のような社交の場に求めているが（ハーバーマス [1973]）、その主体となっていたのは近代ブルジョアジーであり、勤労の精神は産業社会の成立とともに、確立していったと考えることができるだろう。

これに対して開かれた共同体としての側面をみせるアフリカの共同体は、すでにみてきたように、「消費の共同体」として、消費や分配を一義的に志向し、近代市民社会を支える勤勉倫理（ヴェーバー [1989]）とは大きく異なるエトスのなかに生きている（杉村 [2004]）。人と人の相互行為のなかには、生産—労働過程の場面とは異なる次元に展開するものがある。そのなかには、人間の再生産のための物質の消費の場としての家族や社会的再生産の場としての消費集団の再生産過程を生み出していくための相互行為があり、人は信頼関係のある家族や地域社会を再生産していくために、ことあるごとに訪ねたり、贈り物をしてその信頼関係を確認していく（杉村 [2004: 400-402]）。

アフリカ小農世界では、この「社会的再生産」の場の人と人の関係を生み出すための婚資などの〈社会的富〉の領域に、しばしば大がかりな制度化したシステムを作りだし、そこに経済的価値を与えてきた。そしてこのような社会的再生産の過程のなかに一義的な位置づけがなされる、アフリカ農村における「人と人」の関係のなかには、その裏側では、常に食べ物「分けるのが当たり前」というような、「情の経済」が展開することになっているのである。

その社会の生活を支える「情の経済」は、近代化には適応しがたい側面をもつ (Hyden [1980, 1983], 杉村 [2004])。なぜなら近代社会においては、「情の経済」の主体であるアフリカ農民は、親族や大家族のなかに埋め込まれた存在にすぎず、常に関係のなかに生きる人間は、非生産的、非近代的人間としてとらえられるからである。それゆえアフリカ社会において、マテンゴのセングを事例としてここでみてきたような、ひとつの自生的な「公共圏」に出会っても、西洋の近代市民社会をモデルとした「公共圏」とは疎遠なものとして看過される場合も多い。

しかし一方、ハーバーマスと並んで、現代の「開かれた討議の場」に集約されるような、新たな公共圏の概念の提唱に大きな役割を果たしたアーレントの視点のなかでは、ギリシアのポリスに原像が求められ、その視点のなかに形象化される公共圏とそれをつむぎ出す人の姿は、近代的人間像とは大きく異なる (アーレント [1994])。アーレントにおいては、近代の「労働—生産」志向は乗り越えられるべきものとして批判的な視点から取り出され、ギリシアのポリスのなかにあった「労苦から解放され余暇をもつ人間」(今村 [1998: 160]) の公共の場での対話に焦点が当てられている。

もとより古代ギリシアは奴隷制に支えられた階層的な農業社会であり、平等社会を基調とする「自然社会」として取り出されるアフリカの農村とは異なる。しかし「労働」を高く評価せず、むしろ余暇を至上のものとして、そのなかに人間関係をつむぎ出すコミュニケーション行為に高い価値を与えるという意味で、ギリシア社会はアフリカ農村のような、労働よりも人と人の

関係の構築に一義的価値をおくような自然社会のあり方をその内部に温存しているともいえる（杉村 [2004: 400-402], アーレント [1994: 19-42]）。

2. セングの精神と新しい公共圏の可能性

以上の議論を踏まえて、このような消費の共同性に支えられたアフリカの「公共圏」という視点から、さらに冒頭のアフリカにおける「市民社会」論に立ち戻ってみるとどうであろうか。小稿において取り上げてきたマテンゴ社会では、セングは、外部からそこに立ち寄る人が、最初にそこに迎えられる公共空間であり、日常生活の場に埋め込まれた討議の場でもあった。その空間では、食の共有化がなされ、そこに参加する人の実質的な平等と対等性が保障される。そして共食の場における論議は、議論による結論を急ぐのではなく、時間をかけたそこに参加する人の徹底した相互の承認と了解を求める過程である。

マテンゴ社会における、消費の共同体に支えられたこのような「公共圏」の発見は、ヨーロッパ市民社会に範型を求めることの多かった、従前の公共性と共同体にかかわる議論をとらえ直す、新たな可能性を含んでいるともいえる。たとえば齋藤 [2000] は、共同体を閉じた領域としたうえで、公共圏を誰もがアクセスしうる空間として対立的にとらえるが、ここで検討してきたセングとそれをささえる消費の共同体との関係は大きく異なる。むしろマテンゴの事例のなかでは、共同性は内部に向かっても、外部に向かっても、むしろ公共性を喚起するものとして展開するものであり、同時にその公共圏のあり方のなかには、すでに述べたような、「異質なものの共存」としての新たな公共性のあり方と共鳴するものが多い（アーレント [1994]）。

アフリカにおける「市民社会」概念を論じる議論のなかで、ハザンは、エスニック・グループ集団や親族集団を含みこんだ「公共圏」を狭溢な利益を志向するものとして、「市民社会」領域から排除する必要があるという議論を行っている（Chazan [1991], 遠藤 [2001: 149-154]）。しかしこれまでみて

きたマテング社会のセングの伝統とその空間は「開かれた話し合いの場」であり、しかもそこに参加する人が「消費の共同体」に支えられて対等、平等な関係に立つという意味で、その場はまぎれもなく、ひとつの原初的公共領域として機能していたともいえるだろう。

そしてこのようなマテングの公共圏は、開かれた共同体に支えられて、その内部においてもまた外部においても、地域社会の広がりの中で、伸縮自在に展開する。そしてそれはフォーマルセクターの背後でインフォーマルなものとして位置づけられるというだけでなく、開発プログラムというフォーマルな世界をも支える「公共圏」にも展開しうるものなのである。

マテングのキンディンバ村のなかでは、ハイドロミルの利用者はそれを利用することによって、共通の便益が図られるとともに、公共空間のなかで利用者達の現金が集積される。そのことによって、その収益は公共の活動に使われ、大きな資金を扱うにもかかわらず、私益の事業者に分裂せず、公的な活動として、地域の福祉の水準を高め、女性たちの労苦を軽減している。そしてここには、日常の消費生活とかかわる次元に開かれた社会開発と、「消費の共同体」に支えられたセングの精神との豊かなつながりが展開しはじめている。

このような自給的生活における消費の次元の社会開発とその持続的発展のあり方は、マテング社会において行われた「生産」次元のほかのプロジェクトの短期的に終わりがちな成功と比べると際立ったものがある。そこから得られる収入は、自主運営のもとに、その日常的な修理や、サイト周辺の地域環境の整備に当てられ、その余剰を将来のハイドロミルの、自らの手での改修や再建築の財源にしていくことや、地域の社会福祉のさらなる確立に利用していくことがメンバーのなかで議論されている。そこにはすでにみてきたように、カマティ・ヤ・セングの活動のなかに内在化されている消費の共同性と親和的な「公共性」が、その活動の安定的な展開と発展のために、ひとつの大きな下支えになっていると考えられる。

そしてハイドロミルに対するアクセスや公共的な活用のあり方のなかには、

すでにみてきたように、かつてのセングの精神がいわば現代的に再構成された様態をみることができる。そのひとつはカマティ・ヤ・セングの活動のなかにみられる「分ける」こと、「共有」することや成員への平等主義的感覚である。そして重要なこととして取り出さなければならないのは、そうしたセングの精神を共有し、連帯していくための手続きとしての「協議」の濃密なプロセスであろう。中村が指摘するように、協議システムを維持するための機構は、「当事者の直接的な人格である。直接的な人格であるがゆえに、個々の経済単位が相互に粘り強く、自主的な協議を行い、最終的な合意にいたるまで交渉するより他にない」（中村 [1993: 128]）。それゆえこの協議システムは、協議の内容や相互の信頼を高めていくために、多くの時間をそこに割かなければならないが、マテング社会においては、そうした事柄が、すでにみたような、今日もふんだんに生活のなかに組み込まれた「共食」的行為によって支えられている。

こうしたことから、効率性を求める近代の視点からみれば非生産的、非効率的なもので、「効率や統合という点において、既存の市場や計画に劣る」（中村 [1993: 128]）ものとして取り出されるだろう。しかし一方、近代社会は、連帯と共同性を失ってきた¹⁷⁾。近代的自我は、「信条を貫いて変らぬ精神的な自我であり、しかし、その信条のために肉体的な自分をも変へようとする自我」（山崎 [1987: 200]）という特質ももち、そうした能動性が、ある意味では他者との連帯を排除し、関係性の希薄な社会を生み出している。このような近代の困難をとらえる立場からは、セングの精神に支えられた「公共圏」のあり方のなかには、近代社会のなかで失われた信頼や連帯という、本来の「公共圏」を取り戻すひとつの可能性が示されているようにも思われる（齋藤編 [2003]、山崎 [1987]）¹⁸⁾。

おわりに

すでにみてきたように、内発的発展の呼びかけに応じて村の側の開発の主体としてその名前を付けられたセングは、マテngo伝統社会のなかでは、助け合いの場、ともに食べることに支えられた共同性を生み出す母体でもあったが、しかしセングにみられる共食慣行は閉じられたものではない。このようにマテngo農村のなかにみられる公共性と向きあう共同体の原像は、開かれた共同体像として、また異質な集団をその内部に取り込むものとして、これまで設定されてきた共同体のあり方とは大きく異なるものである。農村共同体のなかでも、確かに日本の農村などを事例とするならば、土地に縛られた固定されたメンバーシップが浮き彫りにされる。それに対してアフリカの伝統農村社会においては、その対極をなすものとして常に離合集散するようなかたちで集団が再構成され、その集団にあわせて資源は再分配される。集団を統合するものは、消費や再生産の場を契機とする生活集団である（杉山[2007: 103-118]）。

本章でみてきたピット農法（穴掘り農法）でよく知られたマテngo社会の古い村は、より流動性を有するアフリカ農村と比較すれば、固定的で土地との強いつながりをみせる社会であるが、一方で恒常的に古い村から新しい村へと住民が移動するという流動性を含みこんだ社会であり、古い村のなかでも集団の再編が展開してきた。マテngoの伝統社会においてその流動的な集団を統合するものがセングであり、常に開かれた共同体を作り出す公共の場としても機能していた。そうした公共性の再創造の規範的モデルとして、セングが社会開発の場に立ち現れているのである。

セングの再創造の現場に立ち会うならば、ここでは伝統は解体されるのではなく、農村のなかに新たな「対等—平等」な対話の空間としての市民社会像を創造するための重要な規範として機能しているのである。そしてこれはこれまでの近代的な経済発展の目標とは異なる、市民参加による新しい価値

の実現を図る人間開発（西川 [2000: 292-297]）を主題化し、模索するものもある。

もちろんセングの精神に支えられたその公共空間の性格は、〈個〉を中心においたヨーロッパ近代の「市民社会」の公共空間に対して（山崎 [1987: 147-230]）、「共食」の社会的関係を基礎におくような〈個〉を超えた規範に支えられたものであり、そこには自ずから異質な「公共性」の意味も付与されている。しかしここですでにみてきたように、マテングの共同体はそれ自身開かれた共同体として、マテングの公共圏を支えるものとして機能し、「開かれた場」を求める市民社会の問いかけに対して、ひとつの共鳴性をもって対応している。そしてこのことのなかには、近代と西洋市民社会の成立を重ね合わせ、そこに成立する公共圏を共同体の閉ざされた社会関係の対極におくような、これまでの近代、共同体、市民社会のアボリアをもう一度再考させる契機が含まれているようにも思われる。

これまでの一元的な近代的市民社会像、さらにはその背景にある産業主義的近代を超えた地点から、近代を拒否する、世界のなかでも突出した停滞状況を示しているアフリカの現代的展開をとらえなおそうとするならば、近代と伝統という二元論的パラダイムに対して、むしろ伝統の内部差に目を向けてアフリカの位置を明瞭にしていくことが、アフリカの「市民社会」論を検討していくうえでも重要になってこよう⁹⁹。このような近代化、共同体、公共性にかかわる、アフリカ的特質の議論のさらなる進展に関しては、他地域社会との比較考察も含めて次の機会に譲ることにしたい。

[注] _____

- (1) そして興味深いことは、この動きが生産者サイドからではなく、消費者サイドから出ていることであろう。たとえば今日の農村のなかで展開していることのひとつは、地産地消の推進など、農村地域の生産者と消費者が一体となって「たべもの共同体」を生み出そうとする動きである（本野 [2006]）。農村に生活する人も今日の食の安全性などに関する議論に関わる、今や自らの食べ物を再考する時代を迎えており、食を軸として地域のあらゆる再編が

希求されている。そこには産消提携などを媒介とした、真の「消費とは何か」ということをめぐって、スローライフというような、これまでの「生産性」や「効率性」という20世紀のパラダイムを食い破る価値の次元が組み込み込まれている（辻 [2001, 2003]）。

- (2) 1994年から1997年まで、JICAの研究協力プロジェクト「ミオンボウッドランドにおける農業生態の総合研究」が実施された。このプロジェクトは、タンザニア南西部マテング高地において、ンゴロとよばれる在来農法の農業生態や、それを支える社会、経済、文化などを解明することを目的としていた。研究協力プロジェクトの実績にもとづき、1999年から5年間の計画で、ソコイネ農業大学（Sokoine University of Agriculture: SUA）地域開発センター（SUA Centre for Sustainable Rural Development: SCSRD）プロジェクトが始まり、その対象地域のひとつとしてキンディンバ村が選択され、社会開発のひとつとして上記の試みがされた。
- (3) 共食集団を軸にしたクム社会の社会構造の詳細な分析は、杉村 [2004] の第4章を参照せよ。
- (4) また、サバナや乾燥疎開林では、ひとつの村落のなかのリネージの構成においても世代深度が浅く、かつて存在した共食慣行も商品経済の流入のなかで解体した場合も多い。
- (5) たとえばガーナの事例のように、アフリカのなかでも植民地時代以来の外部からの開発によって、プランテーション型商品的農業生産がとくに発達し、より強い従属関係にある周辺部社会のなかにおいても、伝統的な共同的社会関係がかたちを変えながら再生産されつつある状況が語られはじめている（高根 [1998: 11-24]）。
- (6) この議論との関係で重要な視点のひとつが、伝統と近代という二分法ではなくて、伝統社会のありようを近代の源泉としての農業社会とそれ以前の自然社会に分けて、伝統と近代の接合と非接合を弁別する視点をあたえた上山の人類史の三段階論であろう（上山 [1966]）。上山は産業革命以前の世界を、紀元前4000年頃にエジプト、メソポタミア、インド、中国で相次いで成立した文明以後と文明以前に分かつ。上山によれば、文明以前の世界は、重層化の発達しない社会であり、上山はこのカテゴリーを自然社会と呼び、このカテゴリーのなかには、平等主義的社会としての狩猟・採集、牧畜、農耕社会が位置づけられる（杉村 [2004]）。これに対して、文明以降の社会においては、重層社会が生み出されてきた。そして社会としては、これまでの流動的な血縁社会に対して、家族、地域共同体、国家という構造をもつ定住社会が生み出されてきた。この「農業革命」以降の農業社会が、「生産の共同性」に支えられた「定住社会」としてそこに富を蓄積する装置を作りだし、重層社会として国家に至る指向性をもったとする。（杉村 [2004: 434]）。

- (7) すでにみてきた「消費の共同体」としてのアフリカ農村のなかの生活のスタイルは、「生産力主義的」な近代のパラダイムのなかで行われる開発には乗りにくい。しかし一方でこれまでの開発のあり方を根源的に問うもうひとつの発展や持続的発展、内発的発展のパラダイムのなかでは、そうしたものが接合する可能性が語られはじめている（西川 [1989], 鶴見・川田編 [1989], 杉村 [2004], 阪本 [2007a, 2007b], Sakamoto [2008], Sugimura ed. [2009]）。
- (8) ンゴロは、もともと民族語で「穴」を意味し、ピット農法ともいわれる。マテンゴの居住する地域は、標高1300~2000メートルの急峻な山々が連なっており、豪雨になれば、斜面の畑が流されやすくなり、ンゴロの穴は、山地斜面での流出を防ぐ機能をもっている（加藤 [2002: 92-94]）。このようなンゴロにもとづいた農法はアフリカに一般にみられる粗放農法とは異なり、きわめて労働集約的である。
- (9) 村の最古老からの話によるとこれらの集落は1900年以前から開発されたとされる。そして数名の長老によれば、彼らの祖先はリテンボやほかの地域から来たとされる。一方ムツング、ワランジ、ジョンベのような集落はそのあとで開発された。これらは外部からの新しいクランの流入やキンディンバ村の村落内での移動によって人口が村落内部に充填することによって形成されてきた。
- (10) このムシの形成過程は以下のようなものである。マテンゴの農村開発においてはひとつのンタンボをひとつの世帯が占拠し、そこに住みはじめることからその開発は始まる。そしてそのンタンボに家族数が増加してくるとこれはムシを形成することになる。マテンゴ社会は父系制の社会であり、その息子達のなかに男性の子孫を多数生み出した者があれば、そこにも新たにムシが形成されることにもなる。
- (11) 筆者による1996年4月の調査による。
- (12) 筆者による1996年の調査のなかでの長老からの聞き取りによる。
- (13) アフリカにおける邪術の研究は、エヴァンズ=プリチャードによるアザンデの研究をはじめとして、今日に至るまでアフリカにおける人類学的研究の主要な領域をなしている（掛谷 [1986]）。
- (14) マテンゴ社会における邪術についても、筆者自ら調査も行い、呪医等から情報を得てきたが、ここでの記述における「親が子供を呪う」という事例については、マテンゴ社会で長期のフィールドワークを行った加藤正彦氏から得た情報による。
- (15) このような言葉と経験の間を鋭く射抜くアフリカ農民の言語観からするならば、近代に生きる人の言葉は、あまりにも影のないものといえるのかもしれない。そこには人はすべてを語りうるという前提と、言葉を通したコミュニケーション的行為（ハーバーマス [1985: 30-77]）への究極の信頼がある。

- (16) この場面を撮影した、JICA プロジェクトの専門家、増田頼保氏のビデオ映像による。
- (17) 西欧における近代市民社会は、産業主義的な経済と連動しながら、「自由」と「平等」という2つの理念を体現する社会体制をそれぞれ作り出してきた。中村尚司が、岩田昌征（岩田 [1983]）の議論に依拠して述べるように、「ヨーロッパ近代の市民社会の『自由』な経済人であるホモ・エコノミクスは、その後の市場経済システムの理念像となった。次いで『平等』を体現する計画システムは、20世紀のロシア革命と中国革命の産物である」（中村 [1993: 128-129]）。一方フランス市民革命で語られたもうひとつの理念「友愛」は、これまで人類史のなかで中心的に主題化されることはなかったが、今日すでに述べた2つの体制の限界をにらみつつ、「連帯」を求める新しい公共圏の視角として浮かび上がってきている（中村 [1993: 129]）。
- (18) 冒頭に触れた環境問題とともに、南北問題の深化もあり、北の「市民社会」の論理と南のなかに台頭する「市民社会」の論理には大きな摩擦も起こっている（松田 [2007: 381]）。近代民主主義は確かに優れた側面を有しているが、しばしば「民主主義」の名のもとに多くの戦争がしかけられ、大きな犠牲を残していく。公共性なるものを強者と弱者、北と南の市民がともに了承するような21世紀型の市民社会とそれを支える公共圏のあり方の構築のためには、公共圏そのものを支える20世紀型のパラダイム転換が必要になってこよう。
- (19) セン [2006: 73] は、伝統社会のなかに存在する「公共空間」について、「たとえば、インド、中国、日本、韓国、イラン、トルコ、アラブ世界それにアフリカの多くの地域には、政治や社会、文化などの問題について長年、公の場における議論を奨励し擁護してきた伝統があります。そうした事実は民主主義思想の歴史で、もっとしっかりと認識されるべきでしょう。世界各地のこの伝統だけでも、民主主義は西洋の考え方である、したがって西洋化の一つの形態にすぎない、とたびたび繰り返されてきた見解に、疑問を投げかける十分な根拠になります」と述べているが、近代社会に対する対応として今日みられる第三世界の内部差ということを踏まえるならば、こうした伝統社会に存する「公共性」の意味の内部差についても、そこに立ち入って検討する必要がある。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- アーレント, ハンナ [1994] (志水速雄訳) 『人間の条件』ちくま学芸文庫。
- 赤羽裕 [2001] 『低開発国経済論』岩波書店。
- 荒木美奈子 [2006] 「タンザニア南部マテンゴ耕地における『地域開発』」(『開発学研究』第17巻第1号 15-20ページ)。
- 池野旬編 [1999] 『アフリカ農村像の再検討』アジア経済研究所。
- 今村仁司 [1998] 『近代の労働観』岩波新書。
- 岩田昌征 [1983] 『現代社会主義の新地平』日本評論社。
- ヴェーバー, マックス [1989] (大塚久雄訳) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店。
- 上山春平 [1966] 「社会編成論」(川喜田二郎・梅棹忠夫・上山春平編『人間——人類学的研究——』中央公論社 73-99ページ)。
- 遠藤貢 [2001] 「アフリカをとりまく『市民社会』概念・言説の現在」(平野克己編『アフリカ比較研究』アジア経済研究所 147-186ページ)。
- 掛谷誠 [1974] 「トングウェ族の生計維持機構——生活環境・生業・食生活——」(『季刊人類学』第5巻第3号 3-90ページ)。
- [1977] 「トングウェ族の呪医の世界」(伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然誌』雄山閣出版 377-439ページ)。
- [1986] 「伝統的農耕民の生活構造」(伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学』アカデミア出版会 217-248ページ)。
- [1994] 「自然と社会をつなぐ呪薬」(掛谷誠編『地球に生きる 2 環境の社会化』雄山閣出版 171-194ページ)。
- 加藤正彦 [2002] 「タンザニア・マテンゴの掘り穴耕作とコーヒー栽培」(掛谷誠編『アフリカ農耕民の世界』京都大学学術出版会 91-123ページ)。
- 齋藤純一 [2000] 『公共性』岩波書店。
- 齋藤純一編 [2003] 『親密圏のポリティックス』ナカニシヤ出版。
- 坂田幹男 [1991] 『第三世界国家資本主義論』日本評論社。
- 阪本公美子 [2007a] 「東アフリカの内発的発展」(西川潤他編『社会科学を再構築する——地域社会と内発的発展——』明石書店 220-234ページ)。
- [2007b] 「アフリカ・モラル・エコノミーに基づく内発的発展の可能性と課題」(『アフリカ研究』70号 137-161ページ)。
- サーリンズ, M. [1984] (山内昶訳) 『石器時代の経済学』ナカニシヤ出版。
- 佐和隆光 [1997] 『地球温暖化を防ぐ』岩波書店。

- 杉村和彦 [1994] 「共食に生きる理性——ザイール・クム人の世界から——」(井上忠司・祖田修・福井勝義編『文化の地平線——人類学からの挑戦——』世界思想社 496-511ページ)。
- [1999] 「マテンゴ農村の商品経済化と社会再編」(池上甲一編「東・南部アフリカにおける食糧生産の商業化がもたらす社会再編の比較研究」平成8年度～平成10年度科学研究費補助金 国際学術研究報告書 137-155ページ)。
- [2004] 『アフリカ農民の経済』世界思想社。
- [2007a] 「アフリカ・モラル・エコノミーの現代的視角」(『アフリカ研究』70号 27-34ページ)。
- [2007b] 「消費の世界とアフリカ・モラル・エコノミー」(『アフリカ研究』70号 119-132ページ)。
- [2007c] 「パラダイムとしてのアフリカ小農世界——20世紀の農林経済学を超えて——」(『農林業問題研究』第165号 第42巻第4号 330-338ページ)。
- 杉村和彦編 [2009] 『21世紀の田舎学——遊ぶことと作ること——』世界思想社。
- 杉山祐子 [2001] 「ザンビアにおける農業政策とベンバ農村」(高根務編『アフリカの政治経済変動と農村社会』アジア経済研究所 223-278ページ)。
- [2007] 「焼畑農耕民における生業と分配」(『アフリカ研究』70号 103-119ページ)。
- セン, A. [2006] 『人間の安全保障』集英社新書。
- 高根務 [1998] 「ガーナのココア農村の土地制度と農村開発」(『開発学研究』第9巻第1号 11-24ページ)。
- 辻信一 [2001] 『スロー・イズ・ビューティフル』平凡社。
- [2003] 『スローライフ100のキーワード』弘文堂。
- 鶴見和子 [1989] 「内発的発展論の系譜」(鶴見和子・川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会 43-64ページ)。
- 鶴見和子・川田侃編 [1989] 『内発的発展論』東京大学出版会。
- トッド, E. [1992] (石崎晴巳訳) 『新ヨーロッパ大全 I』藤原書店。
- [1993] (石崎晴巳・東松秀雄訳) 『新ヨーロッパ大全 II』藤原書店。
- 中村尚司 [1993] 『地域自立の経済学』日本評論社。
- 西川潤 [1989] 「内発的発展論の起源と今日的意義」(鶴見和子・川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会 3-41ページ)。
- [2000] 『人間のための経済学』岩波書店。
- ノルゴー, ヨアン・S./ベンテ・L・クリステンセン [2002] (飯田哲也訳) 『エネルギーと私たちの社会——デンマークに学ぶ成熟社会——』新評論。
- ハーバース, J. [1973] (細谷貞雄・山田正行訳) 『公共性の構造転換』未来社。
- [1985] (河上倫逸・M・フープリヒト・平井俊彦訳) 『コミュニケーション

的行為の理論（上）』未来社。

- ハイデン, G. [2007] (鶴田格・黒田真訳)「情の経済とモラル・エコノミー——比較の視点から——」(『アフリカ研究』70号 35-50ページ)。
- フランク, A. G. [1976] (大崎正治・前田幸一・中尾久訳)『世界資本主義と低開発』柘植書房。
- ベル, ダニエル [1975a]『脱工業社会の到来（上）』ダイヤモンド社。
—— [1975b]『脱工業社会の到来（下）』ダイヤモンド社。
- 星昭・林晃史 [1988]『アフリカ現代史1 総説・南部アフリカ』山川出版会。
- 松田素二 [1997]「サバンナのコロニー〈イギリス領東アフリカ〉」(宮本正興・松田素二編『新書アフリカ史』講談社現代新書 304-314ページ)。
—— [1999]「ナイロビにおける住民組織の二つの位相」(幡谷則子編『発展途上の都市住民組織』アジア経済研究所 194-235ページ)。
—— [2007]「セルフの人類学に向けて——偏在する個人性の可能性——」(田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー/ネットワーク/身体——』世界思想社 380-405ページ)。
- 馬淵俊介・角田学 [2004]「地域開発におけるキャパシティ・ディベロップメント——タンザニア国ソコイネ農業大学地域開発センタープロジェクトの事例から——」(『国際協力研究』第20巻第2号(通算40号) 21-31ページ)。
- 峯陽一 [2003]「アフリカ経済と共同体——赤羽理論の再検討——」(平野克己編『アフリカ経済学宣言』アジア経済研究所 187-228ページ)。
- メイヤサー, C. [1977] (川田順造・原口武彦訳)『家族制共同体の理論』筑摩書房。
—— [1980] (山崎カオル訳)『マルクス主義と経済人類学』筑摩書房。
- 本野一郎 [2006]『いのちの秩序 農の力——たべもの協同社会への道——』コモンズ。
- 山崎正和 [1987]『柔らかな個人主義の誕生——消費社会の美学——』中公文庫。
- 湯浅赳男 [1984]『経済人類学序説』新評論。
- 吉田昌夫 [1975]「アフリカにおける土地保有制度の特質と農業変容」(吉田昌夫編『アフリカの農業と土地保有』研究参考資料242 アジア経済研究所 1-12ページ)。
—— [1978]『アフリカ現代史2 東アフリカ』山川出版社。
- 米村千代 [1994]「経営体としての家族」(井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座 現代社会学19〈家族〉の社会学』岩波書店 119-135ページ)。

〈外国語文献〉

- Basehart, H. W. [1972] "Traditional History and Political Change among the Matengo of Tanzania," *Africa: Journal of the International African Institute*, 42(4),

- pp. 87–97.
- [1973] “Cultivation Intensity, Settlement Patterns, and Homestead Forms among the Matengo of Tanzania,” *Ethnology*, 12(1), pp. 57–73.
- Chazan, Naomi [1991] “Africa’s Democratic Challenge,” *World Policy Journal*, 9(2), pp. 279–307.
- Ekeh, Peter [1992] “The Constitution of Civil Society in African History and Politics,” in B. Caron, A. Gboyega, and E. Osaghae eds., *Democratic Transition in Africa, Proceedings of the Symposium on Democratic Transition in Africa*, CREDU Documents in Social Sciences and Humanities Series No. 1, Ibadan: CREDU, pp. 187–212.
- Hyden, G. [1980] *Beyond Ujamaa in Tanzania: Underdevelopment and Uncaptured Peasantry*, London: Heinemann.
- [1983] *No Shortcuts to Progress. : African Development Management in Perspective*, London: Heinemann.
- [2006] *African Politics in Comparative Perspective*, New York: Cambridge University Press.
- Japan International Corporation Agency (JICA) [1998] “Integrated Agro-ecological Research of the Miombo Woodlands in Tanzania,” Final Report, JICA.
- Kasfir, N. [1998a] “The Conventional Notion of Civil Society: A Critique,” in N. Kasfir ed., *Civil Society and Democracy in Africa: Critical Perspective*, London: Frank Cass, pp. 1–20.
- [1998b] “Civil Society, the State and Democracy in Africa,” in N. Kasfir ed., *Civil Society and Democracy in Africa: Critical Perspective*, London: Frank Cass, pp. 123–149.
- Rutatora, D. F., and S.F.Nindi [2008] “Endogenous Development and Moral Economy: A Case of the Matengo Society in Mbinga District, Ruvuma Region, Tanzania,” I. K. Kimambo, G. Hyden, S. Maghimbi, and K. Sugimura eds., *Contemporary Perspectives on African Moral Economy*, Dar es Salaam: Dar es Salaam University Press, pp. 180–199.
- Sakamoto, K. [2008] “The Moral Economy in Endogenous Development: Towards a New Perspective from the Economy of Affection in Africa,” in I. K. Kimambo, G. Hyden, S. Maghimbi, and K. Sugimura eds., *Contemporary Perspectives on African Moral Economy*, Dar es Salaam: Dar es Salaam University Press, pp. 147–161.
- Schmied, D. [1988] “Subsistence Cultivation Market Production and Agricultural Development in Ruvuma Region, Southern Tanzania,” Ph. D. Dissertation, Erlangen University.
- Sugimura, K. [2004] “African Forms of Moral Economy in Rural Communities: Com-

parative Perspective," *Tanzanian Journal of Population Studies and Development*, 11(2), pp. 21-37.

Sugimura, K. ed. [2009] *Comparative Perspectives on Moral Economy: Africa and Southeast Asia*, Proceedings on 3rd International Conference on Moral Economy, Fukui Prefectural University.